

今川先生の御逝去を悼む

川 口 市 郎*

今川文彦先生は1月31日午後11時になくなられた。先生は京都大学を退官後、奈良教育大学等の非常勤講師をしておられた。一昨年、京都で開催されたIAU地域総会に出席されたが、いささかやせておられるようにお見受けした。其の後入院されて治療された結果一旦は回復、教室に立ち寄られた時、もうひとまわり(12年)頑張るつもりだと大変お元気であった。まだ72歳で今後の御活躍を期待していただけないことである。

先生が教室に勤務されたのは昭和20年である。戦争中は航空隊で気象観測に従事され、中国東北部におられたときいている。教室においでになってからは、位置天文学も含めた天体観測全般について学生の指導に当っておられた。昭和30年セイロン島で皆既日食があり、戦後初の海外観測隊が派遣されることになった。当時教室には今川先生以外の適任者がなく、太陽スペクトルの理論的研究をしていた私が先生の助手となり、宮本正太郎先生のアイディアにもとづく観測計画をもってセイロン島におもむいた。観測隊は古畑先生を隊長として、そのメンバーには末元・海野・高窪・田鍋氏など錚錚たる顔触れがふくまれていた。この中であって今川先生は“謹厳なる今川さん”と全員から親しまれ、隊が一团となって緊張の中にも和気藹藹たる雰囲気の中で皆既当日をむかえることができたのも、先生の飾らぬ率直なお人柄があったからであろうと考えている。観測そのものは曇天のため失敗に終わったが、写真測光などやったこともなかった私は、先生から“観測”というものを学んだ。このときの勉強が、それから7年後のニューギニア日食観測の成功につながったのであろう。

今川先生の教室内での最大のお仕事は40/60cmのシュミット望遠鏡の製作と大宇陀観測所の建設であった。このシュミット望遠鏡は清水 彊先生の科研費(A)で製作されたものであるが、40cm補正板の研磨は難航した。その最終テストは補正板を望遠鏡に装填して星野写真を取り、星像判定により行った。当時望遠鏡架台は福知山にあり、大阪で研磨した補正板は何度も福知山に運搬された。星野写真の撮影から星像判定までは今川先生が全責任をもってあたられ、私は研究室でプレートにみいっていられた“謹厳”そのものの今川先生のお顔を今でも鮮やかに想いだすことができる。そして度重なる福知山通いの間に先生はウイスキーの味を覚えられたと



きいている。

先生の努力が実って、補正板が完成してからさらに難問が発生した。ある事情により、望遠鏡ならびに観測施設を福知山から奈良県大宇陀町に移転せざるをえなくなった。このとき土地購入と施設の運搬に要する予算は全く準備されていなかった。しかしながら、大宇陀観測所建設にかかる先生の情熱にほだされ、理学部事務室、さらには本部経理部が動いてくれて文部省も遂に予算をみとめてくれるまでになった。このため先生は理学部事務長や経理掛長と何晩も徹夜され計画書を練られたことを私は知っている。実際先生の異常なまでの執念がなかったならば、現在の大宇陀観測所は実現していなかったであろう。そして先生は大宇陀観測所が完成した年に退官されたのである。昨年暮、先生の病状がかなり悪いときいて、私共はお見舞のため奈良県立病院に先生をおたずねした。このとき先生の御所望により、先生の精魂をこめられたシュミット望遠鏡で撮影された美事なハレー彗星の写真と流葉シュミットシンボの集録を持参した。先生がなくなられる直前まで、先生は見舞客にハレー彗星の写真をみせておられたとは奥様のお話である。

天文学研究の進歩変遷はまことに早い。各時代の研究の要請に応じて、天文学研究者は全力をあげては去ってゆく。先生の宇宙物理学教室に在職中、先生は教室運営の要であった。なぜならば先生は人の嫌がる仕事を率先して引受けて下さり、公平無私、おだやかで暖いお人柄をもって教室をリードして下さったからである。そして終戦直後殆んどゼロに等しかった観測的研究水準の向上に全力を傾倒して、現在の教室の観測的な研究態勢ができたと思つたと私は考えている。先生が神の国に旅立たれた今、その努力を継承・発展させるのが後輩の任務であらうと思うのである。

* 京大理 Ichiro Kawaguchi: